

慣用句と右方転移

著者名(日)	藤巻 一真
雑誌名	Scientific approaches to language
巻	5
ページ	233-250
発行年	2006-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000149/

慣用句と右方転移*

藤巻一真

神田外語大学・東京国際大学

日本語の右方転移文にはさまざまな提案(Abe 1999, Endo 1996, Haraguchi 1973, 井上 1978, 久野 1978, 黒木 2005, Tanaka 2001, Watanuki & Hasegawa 2003 等)がなされているが、本稿では、慣用句の絡んだ右方転移文の新たな例を提示し、それが理論的にどのように捉えられるかを考察する。特に、左方移動による慣用句の固定性の違いを基に、右方転移文において、慣用句がどのような振る舞いをするかを観察し、左方移動における慣用句の区別が、右方転移文においても有意義であることを示す。理論的には、本稿における固定性の低い慣用句の右方転移文を扱っている Tanaka 2001 に基づく説明を試みる。そして固定性の高い慣用句の右方転移文も含め、本稿における現象は、pro と左方移動の両方を含む Tanaka 分析によって説明が可能であることを示唆する。

1. はじめに

慣用句には様々な興味深い特徴があり、それ故に難しい問題が含まれている。その中でも、動詞が含まれる(1)のような慣用句で、その一部となっている名詞句（特に目的語）を動詞と切り離して取り出せるかということに関しては、話者の間で差はあるとしても、話者個人のなかでは比較的明らかなものと考えられる。

* 本稿は、ワークショップ「日本語の主文現象と統語理論」におけるハンドアウトを元に加筆・修正したものである。ワークショップにおいて佐野まさき先生、松岡和美氏、宗像孝氏から、また、本稿に至るまでに、井上和子先生、長谷川信子先生を始め、伊藤健人、大倉直子、上田由紀子、神谷昇、服部葉子、眞鍋雅子、山田昌史、綿貫啓子の各氏から、貴重なご意見を頂いた。ここに記して感謝申し上げます。当然ながら本稿における誤り等は、筆者自身に責任がある。

- (1) a. 太郎がホテル業に手を伸ばした。 (固定性が低い)
 b. 太郎が花子の論文に手を入れた。 (固定性が高い)

(1a)の「～に手を伸ばす」という慣用句は、その一部である「手を」をかき混ぜ(scrambling)により移動することが可能であるのに対して、(1b)の「～に手を入れる」の場合は、「手を」を移動することが不可能である。

- (2) a. 太郎が手をホテル業に伸ばした。(Miyagawa 1997)
 b. * 太郎が手を花子の論文に入れた。(Miyagawa and Tsujioka 2004 改変)

(2)のように、かき混ぜにより、慣用句は固定性に関して(3)のように分類可能である。¹

- (3) a. Loose Idioms (LI): 手を伸ばす、けちを付ける、腹を立てる (以下、 はLI)
 b. Fixed Idioms (FI): 手を入れる、拍車をかける、油を売る (以下、 はFI)

本稿では、固定性の低い慣用句を Loose Idiom(LI)と呼び、固定性が高い慣用句を Fixed Idiom(FI)と呼ぶことにする。

同様のことが直接受け身文においても観察される。(4)の LI においては、「けちを付ける」を「けちが付けられる」にして受け身文をつくることが可能であり、(4c)のように「けちが」が移動しても慣用句の意味が保持されている。

- (4) a. 太郎が花子の仕事にけちを付けた。(LI)
 b. 太郎によって花子の仕事にけちが付けられた。(原田 1977 改変)
 c. けちが太郎によって花子の仕事に付けられた。(Hoshi 1991 改変)

一方、(5)の FI においては、Fujimaki 2005 で示したように、「手を入れる」から「手が入れられる」のようにして直接受け身文を作る場合、「手が」が元位置にある場合にのみ可能であり、それを移動した場合は、直接受け身文を作ることは不可能である。

¹ 他のテストは宮地 1982 や村木 1985 を参照。

- (5) a. (昨日) 指導教官によって花子の論文に手が入れられた。(FI)
 b.* (昨日) 指導教官によって手が花子の論文に入れられた。
 c.* (昨日) 手が指導教官によって花子の論文に入れられた。

(Fujimaki 2005)

以上、仮にかき混ぜと直接受け身文において左方への移動が関与していると仮定すれば、慣用句が左方移動により LI と FI に分けられるということを見た。²そこで、本稿ではこの左方移動による慣用句の区別が、(6b)のような右方転移文(Right Dislocation)においてどのような振る舞いをするのかを中心に見ていくことにする。

(6)a. 太郎が新しい車を買ったんだって。

b. 太郎が買ったんだって、新しい車を。 (右方転移文)³

以下、セクション2では、右方転移文の先行研究について概観し、特に本稿との関連で Tanaka 2001 の分析を詳しく眺める。この Tanaka の分析を基にセクション3では、慣用句が絡んだ右方転移文を対象とし、左方移動における慣用句の区別が、右方転移文でも観察されることを見る。但し、ディスコースにおいて当該の慣用句が既出である場合には、許容度が上がることを見る。いずれも Tanaka 2001 の分析を基に説明を試みる。セクション4では、観察のまとめを行い先行研究との関連を述べる。最後にセクション5では、本稿での分析の理論的な問題および解決の方向を示す。

2. 右方転移文に関する先行研究

2.1 先行研究概略

右方転移文の分析には概略、2文(またはそれ以上)から、同一要素

² Saito 1985 等に従い、かき混ぜを移動と仮定する。直接受け身文においても移動が関与していると仮定するが、その原因と移動先はここでは議論の対象外である。

³ 本稿では久野では後置文と呼ばれる(6b)の文に、便宜上、右方転移文という用語を用いる。

を削除する分析と、1文からある要素を左方または右方へ移動する分析の2種類がある。⁴例えば(6b)は、(7)に挙げた先行研究により、概略(8)のように分析される。⁵

- (7) a. 削除 (+ pro) (Endo 1996, 井上 1978, 久野 1978)
 b. 移動+削除 (Abe 1999, Tanaka 2001, 綿貫 2006)
 c. 右方移動 (Haraguchi 1973)
 d. 左方(Operator)移動 (Watanuki & Hasegawa 2003)
 e. 残余句移動 (黒木 2005)
- (8) a. [太郎が pro_i 買ったんだって],
 [太郎が新しい車を_i ~~買ったんだって~~] (削除)
 b. [太郎が pro_i 買ったんだって],
 [新しい車を_i 太郎が ~~t_i 買ったんだって~~] (移動+削除)
 c. [[太郎が t_i 買ったんだって] 新しい車を_j] (右方移動)
 d. [OP_i [太郎が t_i 買ったんだって] 新しい車を_j] (左方 Operator 移動)
 e. [[太郎が t_i 買ったんだって]_j [[新しい車を]_i t_j]
 ((主題化)+残余句移動)

本稿では、この中で慣用句に関する議論をしている Tanaka 2001 ((7b, 8b) の分析) を取り上げ、後の分析の基礎とする。⁶

2.2 Tanaka 2001 の分析

Tanaka 2001 では、(9a)の右方転移文を(9b)のように分析している。これは、久野 1978 の洞察と分析を取り入れ発展させた形となっている。先ず、もともと S1 と S2 の2文があり、S2において削除が起こるところが、久野の分析の重要な点である。Tanaka ではさらに、右方転移文がかき混ぜと同様の特性を示すことから、S2においてかき混ぜ、つまり、左方移

⁴ 当然それぞれの分析の詳細は異なり、予測されることも部分的に異なる。詳細は個々の論文を参照。

⁵ 本稿では、痕跡(trace)を便宜上用いるが、コピー(copy)と読み替えて頂いて構わない。

⁶ Abe 1999 において Tanaka 2001 と同様の分析が提案されている。本稿では、便宜上慣用句を扱っている Tanaka の分析により説明を試みる。当然ながら本稿での現象が Abe の分析で説明可能であることは、言うまでもない。

動が想定されているところが特徴である。

(9) a. ジョンが読んだよ、LGB を。

b. [s₁ ジョンが pro 読んだよ], [s₂ LGB を_i [~~ジョンが~~ t_i 読んだよ]]

先ず、S1 においては、S2 の「LGB を」と同一指示になる pro があり（この pro が不在の場合は後に見る空所のない右方転移文(gapless Right Dislocation)）、S2 においては、「LGB を」がかき混ぜにより移動され、残りが削除される。この S2 におけるかき混ぜにより、右方転移文とかき混ぜの共通性を説明し、日本語の右方転移文と英語の Right Dislocation との差を説明している。⁷

さて、Tanaka は(9b)の傍証を固めるものとして、慣用句が絡んだ右方転移文の例を挙げている。Tanaka 自身は区別をしていないが(10b)が可能であることから「腹を立てる」は、本稿で言うところの LI である。

(10) a. ジョンが腹を立てた。

b. 腹をジョンが立てた。 (「腹を立てる」は LI)

c. ??ジョンが立てたよ、腹を。(Tanaka's (65) p.575)(??は Tanaka の判断)

この LI が絡んだ右方転移文(10c)は、(11)のように分析されている。

(11) [s₁ ジョンが pro_i 立てたよ], [s₂ 腹を_i [~~ジョンが~~ t_i 立てたよ]] (T)

大切なことは、S2 において、「腹を」がかき混ぜにより移動されているが、(10b)が可能であることから、それ自身は問題がないということである。そこで、Tanaka では(10c)の非適格性を S1 における pro と動詞「立て」が不完全な慣用句であることから説明している。

(12) a. [s₁ ... [vp pro_i 立て] ...] [s₂ 腹を_i [vp t_i 立て] ...]

b. [vp pro_i 立て]=> 不完全な慣用句

c. [vp t_i 立て]=> 完全な慣用句

⁷ 削除における S1 と S2 の平行性は何かという問いには sluicing に近い identity によるものとされている。詳しくは Tanaka 2001 の fn. 7 を参照。

2.3 問題

Tanaka の分析および説明が正しいとすると、(13)の帰結が導き出される。この帰結に対して事実はどうであるかをセクション3で見ることにする。

(13) Tanaka の分析からの帰結

左方への移動(scrambling)を含む Tanaka の分析を取ると、固定性の高い(3b)の慣用句(FI)においても、当然、RD は不可能となる。なぜなら、慣用句の固定性に関係なく、どちらのタイプの慣用句(LI と FI)であろうと、不完全な慣用句(incomplete idiom)を S1 に含むからである。

3. データの観察と分析

このセクションでは、先ずディスコースがない場合には FI の右方転移文は不可能であることを見る。さらに LI のそれに比べると若干の差があることを見る。次にディスコースにおいて当該の慣用句が与えられた場合には、FI の場合も LI の場合も右方転移文は、両者の差を保持しながらも、許容度が上がることを見る。

3.1 右方転移文における LI と FI の差

先ず、ディスコースのない状況での右方転移文(14)を見てみる。⁸

- (14) a. ?? 太郎が次郎のことで立てたんだよ、腹を。 (LI)
b. ?? 太郎がホテル業に伸ばしたんだよ、手を。 (LI)
c. * 太郎が喫茶店で売っていたんだよ、油を。 (FI) (慣用句解釈不可)
d. * 太郎が社長の顔に塗ったんだよ、泥を。 (FI) (慣用句解釈不可)

⁸ 以下、本稿の右方転移文においては文末要素として「のだ・んだ」等を使用する。より自然にする為ではあるが、右方転移文が主文現象であり、モダリティに関係していると考えられるからである。これに関して、佐野まさき氏より、後に見るディスコースによる許容度の改善にみられるような効果が、これらの文末要素によって話者個人内でおきる可能性がある」と指摘して頂いた。

(14ab)が LI の右方転移文であり、(14cd)が FI のそれである。両者において筆者には若干の差が感じられるが、いずれも許容度が低い。この LI に関する判断は Tanaka のものと合致する。ただし、Tanaka においては観察されていない FI に関しては、LI との差がありそうであるというのがここでの重要な点である。これらの派生は Tanaka の分析によると(15)のようになる。

(15) (14)の派生

- a. ?? [s₁ 太郎が次郎のことで pro 立てたんだよ],
 [s₂ 腹を [太郎が... t 立てたんだよ]]
- b. ?? [s₁ 太郎がホテル業に pro 伸ばしたんだよ],
 [s₂ 手を [太郎が... t 伸ばしたんだよ]]
- c. * [s₁ 太郎が喫茶店で pro 売っ ていたんだよ],
 [s₂ 油を [太郎が... t 売っ ていたんだよ]]
- d. * [s₁ 太郎が社長の顔に pro 塗っ たんだよ],
 [s₂ 泥を [太郎が... t 塗っ たんだよ]]

(14ab)の許容度の低さは S1 における不完全な慣用句の存在にあるということになる。このことは (14cd)の FI においても同様である。

次に(14)における判断が正しいとすると、この両者における若干の差がどこからくるのかであるが、Tanaka の分析を用いると S2 におけるかき混ぜにおける可否の差から生じるという説明が可能となる。つまり、(14ab)においては、S2 におけるかき混ぜが可能であるのに対し、(14cd)においては、そのかき混ぜも不可能であるという統語上の差から両者の差が説明できるということである。これをまとめると(16)のようになる。

(16)	S1 において	S2 において
?? (14a)/(14b):	不完全な慣用句(×)	LI なのでかき混ぜは可(○)
* (14c)/(14d):	不完全な慣用句(×)	FI なのでかき混ぜは不可(×)

以上、ディスコースの与えられない場合、(13)に挙げたように、LI と FI において若干の差があるものの、慣用句の右方転移文はいずれの場合

も許容度が低いということを見てきた。では、次に Tanaka が挙げている空所を音形のある語彙項目で埋めるとその許容度が上がる例を取り上げ、本稿での FI のものと比較検討する。

3.2 空所のない右方転移文における LI と FI の差

先ず、(17)は、Tanaka 自身の分析を支持する例としてあげられた LI の例である。

(17) 空所のない右方転移文(LI)

- a. 太郎が腹を立てた(んだ)よ、腹を。(Tanaka's (67)、「(んだ)」は発表者加筆)
- b. 太郎がホテル業に手を伸ばしたんだよ、手を。(LI)

この例は本稿の LI の例であり、確かに(14ab)に比べると許容度が高い。Tanakaによると、(14ab)で問題なのは、(15ab)における不完全な慣用句「pro 立て」・「pro 伸ばし」なので、これを解消すればこの問題はなくなるはずで、音形のある語彙項目を pro の代わりに使えば当然許容度が上がるということを示したものである。繰り返しであるが、LI はかき混ぜについては問題がないので、S2 においては何ら問題はない。

ところで、Tanaka においては観察されていないが、本稿での慣用句における区別があるとすると空所のない右方転移文では LI と FI の差が(14)における差よりも、もっと顕著になるはずである。それは、何故かという、S1 における不完全な慣用句の問題が音形のある語彙項目によって回避できるとすると、その差は S2 における差ということになり、そこには Tanaka によると左方移動が関与しているので、右方転移文において LI と FI の間に左方移動における差が観察されることが当然期待されるからである。事実(18)のように(17)との比較において、(14)における LI と FI の差以上に、許容度において差があると感じられる。

(18) 空所のない右方転移文(FI)

- a. ??太郎が喫茶店で油を売っていたんだよ、油を。(FI)
- b. ??太郎が社長の顔に泥を塗ったんだよ、泥を。(FI)

(17)と(18)の派生はそれぞれ(19a)と(19b)のようになる。

(19) (17)と(18)の派生

- a. [_{S1} 太郎が次郎のことで 腹を 立てたんだよ],
 [_{S2} 腹を [太郎が...t 立てたんだよ]] (LI)
- b. ??[_{S1} 太郎が喫茶店で 油を 売っていたんだよ],
 [_{S2} 油を [太郎が...t 売っていたんだよ]] (FI)

(19a)は、LIの右方転移文であるが、S1とS2の両者において問題がないので、許容度も高い。しかし、(19b)のFIの右方転移文では、S1における不完全な慣用句の問題がなくなるとしても、依然としてS2におけるかき混ぜは不可能である。そこから、この許容度の低さが生じるということである。

以上をまとめると次のようになる。

(20) a. 空所のない右方転移文におけるLIとFIの差

LIの右方転移文 (17) <= ??(14ab)

FIの右方転移文 ??(18) <= *(14cd)

b. LIとFIの差の説明

S1において S2において

(17): 完全な慣用句(O) LIなのでかき混ぜは可(O)

??(18): 完全な慣用句(O) FIなのでかき混ぜは不可(X)

以上、Tanakaでは観察されていない空所のないFIの右方転移文を提示し、許容度の低さを観察した。そして、それをTanakaの分析に基づいて説明を与えることを試みた。次の項では、ディスコースにおいて前話者によって当該の慣用句が与えられた場合に、慣用句絡みの右方転移文がどうなるのかを見てみる。

3.3 ディスコース中の右方転移文におけるLIとFI

本項では、Tanakaのいう不完全な慣用句が、ディスコースにおいて完全な形で与えられるとき、(14)で見た許容度の低さが改善されることを見ていく。大切なことは、Tanakaの分析を取ると、FIにおいては、不完全な慣用句の問題以外に、かき混ぜの問題が残るので、ここでも許容度

の低さが観察されることが期待されることであり、実際にそうであることを見ていく。先ず、(21)と(22)はLIの例である。

(21) A: 太郎が次郎のことで腹を立てたらしいよ。 (LI)

B: え、また立てたんだ、腹を。 / また、立てたの、腹を。 /
良く立てるね、腹を。

(22) A: 太郎がホテル業に手を伸ばしたらしいよ。 (LI)

B: え、また伸ばしたんだ/の、手を。

このように、ディスコースで当該の慣用句が与えられていると、許容度が高くなる。これは、(14)と比べると明らかである。次に、(23)と(24)はFIの例であるが、ディスコースで当該の慣用句が与えられているとはいえ、やはり、許容度の低さを残していると感じられる。ただし、(14cd)よりは許容度の低さが改善されているようである。

(23) A: 太郎が喫茶店で油を売っていたらしいよ。 (FI)

B: ??え、また売ったんだ/の、油を。

(24) A: 太郎が社長の顔に泥を塗ったらしいよ。 (FI)

B: ??え、また塗ったんだ/の、泥を。

Tanaka の分析を用いると、(21)は(25a)に、(23)は(25b)のようになる。

(25) (21)と(23)の派生

a. (21) A: ... 腹を立て ...

B: [_{S1} 太郎が次郎のことで pro 立てたんだよ]

[_{S2} 腹を [太郎が... t 立てたんだよ]] (LI)

b. (23) A: ... 油を売て...

B: ?? [_{S1} 太郎が喫茶店で pro 売っていたんだよ]

[_{S2} 油を [太郎が... t 売っていたんだよ]] (FI)

それぞれのS1において、不完全な慣用句の問題はproがディスコースか

ら値を取ることができるかと仮定することにより解消される。⁹一方 S2 においては、LI と FI におけるかき混ぜの差が依然として残り、FI の方が悪いという説明が可能である。

以上をまとめると、次のようになる。

(26) a. ディスコースでの右方転移文における LI と FI の差

LI の右方転移文 (21)/(22) <= ??(14ab)

FI の右方転移文 ?? (23)/(24) <= *(14cd)

b. その差の説明

SI において S2 において

(21,22): pro による慣用句の解釈(○) LI なので scrambling は可(○)

?? (23,24): pro による慣用句の解釈(○) FI なので scrambling は不可(×)

この項では、ディスコースにおいて慣用句が与えられた場合に、空所のない慣用句の右方転移文のように、不完全な慣用句の問題が回避され、LI においては許容度が高くなることを観察した。一方、FI においては、許容度の低さが残るが、これは、S2 におけるかき混ぜが不可能であることから生じていると説明ができることを見た。ここまで観察してきたいずれの場合も、Tanaka で観察されていない FI の例も含め、Tanaka の分析に基づいた説明が可能であることを見てきた。次に、右方転移文とは異なる例において、不完全な慣用句がディスコースにより改善される例を見てみる。

3.4 Tanaka の例再考: 慣用句内の名詞句の省略

次の(27AB)は、Tanaka 2001 の注において挙げられている例である。これは、不完全な慣用句が問題であるということを示す例とされている。確かに、(27B)のような発話は、許容度が低い。ところが、(27CD)のようにすると比較的受け入れやすくなるように思われる。(以下、B, C, D は、

⁹ 実際はこれ以外に慣用句の一部の名詞の指示性に関わる問題がある。特に FI における「油」「泥」にどれだけの指示性があるかが問題であり、仮にそれがないとした場合は、pro の値としてディスコースから何を値として取っているのかが問題となる。セクション5を参照。

発話 A に対する返答の可能性の一つを示す。)

(27) Tanaka の例(A,B は footnote 18 から)

A: マリーが腹を立てたの?

B: *いいえ、ジョンが pro 立てたよ。 (Tanaka 2001)

C: いや、ジョンが 立てたんだよ。

D: いいえ、ジョンが 立てたんですよ。

(28BC)(29BC)も同様に許容度が高いと思われる。

(28) A: 太郎がまたそのことで腹を立てたの?(LI)

B: いや、花子が立てたんだよ。 (Tanaka 2001 改変)

C: いや、花子だよ。花子が立てたんだよ。

D: いや、今度は花子が立てたんだよ、腹を。 (RD)=(21B)

(29) A: 太郎がまたホテル業に手を伸ばしたの?(LI)

B:いや、次郎が伸ばしたんだよ。

C:いや、次郎だよ。次郎が伸ばしたんだよ。

D:いや、今度は次郎が伸ばしたんだよ、手を。 (RD)=(22B)

次に、同様の省略文において FI はどうなるかという、(30)(31)のように悪さを残しながらも比較的、右方転移文よりは許容度が高いように思われる。

(30) A: 太郎がまた喫茶店で油を売っていたの? (FI)

B: ?いや、次郎が売ってたんだよ。

C: ?いや、次郎だよ。次郎が売ってたんだよ。¹⁰

D: ??いや、今度は次郎が売ってたんだよ、油を。 (RD)=(23B)

¹⁰ (30C)(31C)で悪さが軽減されると判断した場合、pro の値の問題が残る。可能性としては、これらの例では VP ellipsis が関与しているとする、VP の値をディスコースから取ることになり、慣用句の意味は VP にあるとすれば、pro の値の問題はなくなる。また、話者によって(30C)(31C)がかなり悪いと判断される場合がある。その場合は、ディスコースにおける「油」「泥」が慣用句としての解釈の場合は、指示物がないことから、pro の値が取れないという説明が可能であろう。但し、この場合は VP-ellipsis 分析は取れないことになる。

(31) A: 太郎がまた社長の顔に泥を塗ったの? (FI)

B: ?いや、次郎が塗ったんだよ。

C: ?いや、次郎だよ。次郎が塗ったんだよ。

D: ??いや、今度は次郎が塗ったんだよ、泥を。 (RD)=(24B)

これらの FI の省略文において、かき混ぜが関与しているとは考えにくいので、その問題がないとすれば、許容度が高くなることが期待され、(30BC)(31BC)において若干の悪さが残るのは、ディスコースによって慣用句を与えられるだけでは、不完全な慣用句が完全には良くなることを示唆していると考えられる。¹¹

4. 観察のまとめと先行研究との関連

セクション3における観察のまとめをすると次のようになる。

(32) 左方移動において観察される慣用句間 (LI と FI 間) の差が右方転移文においても観察される。

(33) a. Tanaka 2001 の不完全な慣用句の例は LI でありそのままでは許容度が低い。本稿における FI の例はさらに低い。??(14ab) vs. *(14cd)

b. 空所のない右方転移文においては、両者(LI と FI)とも許容度の改善が見られる。(17) vs. ??(18)

c. ディスコースにおいて慣用句が与えられていると、右方転移文において、許容度が上がるようである。(21)/(22) vs. ??(23)/(24)

d. 右方転移文とは異なる省略文においても同様に LI と FI の差があり、ディスコースにおいて慣用句が与えられていると、許容度が上がるようである。FI においては右方転移文よりも改善されるようである。(28)/(29) vs. ?(30)/(31)

本稿では慣用句 (LI) の右方転移文を扱った Tanaka 2001 の分析を基

¹¹ 同様のことが、(23)(24)の FI の悪さもこのことに起因している可能性が出てくる。これに関しては今後の課題とする。

に、本稿で提示した新たな例（FI の例等）も含め説明を試みた。大切な点は、1）右方転移文においても、LI と FI の差があること、2）ディスコースによって与えられた慣用句により、右方転移文の許容度が LI と FI の差を保持しながらも改善されることの2点である。先ず、LI と FI の差は、左方移動と同様の移動が関与しているとする説明ができる。Tanaka によれば、その移動はかき混ぜである。¹²次に、ディスコースによる許容度の改善については、ただ単に移動のみを含む分析では困難があると考えられる。それは何故かという、一般に移動をしている場合にその元位置に残るのは痕跡・コピーであり、それがディスコースにより値を変えることは考えにくいからである。一方、痕跡以外の pro を仮定している分析であれば、ディスコースから値を取ることが可能であり、そのどちらも含んでいる Tanaka の分析であれば説明が可能であるということになる。

(34) Tanaka の分析による説明

- a. (32) (33a)は、S2 において scrambling を含むことから。(他の（左方への）移動分析でも可能)
- b. (33b-d) は、S1 において pro を含み、その pro がディスコースにおける慣用句の値を取れることから。

5 残る問題： 慣用句における名詞句の指示性

最後に本稿における分析の問題と解決の方向性を見ておく。慣用句にはその一部の名詞句に指示物があるかどうかの問題（ここでは「指示性の問題」と呼ぶ）がある。それはどういうことかという慣用句「油を売る」において、その一部である「油を」にその指示対象物があるかということである。実際、慣用句の意味で「油を売る」を考えたとき何か物理的な「油」の意味は感じにくい。さらに、この場合の「油を」には

¹² 綿貫 2006 では、右方転移文はかき混ぜと異なる特性を示すとし、右方転移文に移動は含まれてはいるが、かき混ぜではないとしている。詳しくは、綿貫 2006 を参照。

他の意味もないと思われる。

(35) 慣用句における名詞句の指示性

「油を売る」(FI)の「油」の指示対象物はないと考えられる。¹³

仮にそうだとすると、本稿での分析に対して問題が生じる。何故かという
と、(36C)を(37)のように分析し、ディスコースから pro が値を取れる
から、許容度が改善すると説明してきたが、その元となるディスコース
の慣用句の「油を」に何らかの値がないとしたら、何を pro が値として
取っているのかということが問題になるからである。

(36)=(30) A: 太郎がまた喫茶店で油を売っていたの? (FI)

C: ?いや、次郎だよ。次郎が売ってたんだよ。

(37) pro 分析

A: ... 油を売って...

C: ?... [次郎が[pro 売]ってたんだよ] pro=「油」= φ

そこで、この問題に対して、解決の一つとして、(38)のように VP-ellipsis
が関与していると考えることが可能である。¹⁴仮に空所が pro ではなく空
の VP であるとする、その VP がディスコースから慣用句の VP の値
（「油を売る（仕事に話などをして時間をつぶす）」）を取ることが可能
となる。そうすると、慣用句の一部である「油を」の指示性の問題が回
避できることになる。

(38) VP-ellipsis 分析¹⁵

A: ... 油を売って...

C: ?... [次郎が[_{VP} [e] t_i] 売_iってたんだよ]

[_{VP}]=「油を売って」=「時間をつぶす」

同じ問題が、右方転移文にも当てはまるので、(39)の右方転移文も(40)

¹³ 英語の慣用句におけるこの特性については、Wasow et. al. 1984 を参照。

¹⁴ この可能性と問題点については、長谷川信子氏(私信)より指摘して頂いた。

¹⁵ Otani & Whitman 1991 を参照。この分析に対する反論は Hoji 1998 を参照。

の pro 分析から(41)の VP-ellipsis 分析へ移行する必要がある。

(39)=(23) RD

A: 太郎が喫茶店で油を売っていたらしいよ。(FI)

B: ??え、また売ってたんだの、油を。(RD)

(40) pro 分析

A: ... 油を売って...

B: ??[_{S1} 太郎が喫茶店で pro 売っていたんだよ],

[_{S2} 油を [太郎が... t 売っていたんだよ]]

pro=「油」= φ

(41) VP-ellipsis 分析

A: ... 油を売って...

B: ?? [_{S1} 太郎が喫茶店で [_{VP} [e] t_i] 売_iっていたんだよ],

[_{S2} 油を [太郎が... t 売っていたんだよ]]

[_{VP}]=「油を売つ」=「時間をつぶす」

仮に、右方転移文の S1 においても、pro ではなく VP-ellipsis が関与しているとすれば、ディスコースから慣用句の VP の値を取ることができ、「油を」の指示性の問題は消滅する。ここで大切なのは、上述の変更は、S1 におけるものであり、S2 において影響を与えていない点である。つまり、S2 において依然として左方移動が関与しているので、LI と比べ FI の場合は、許容度の低さが残るとの説明が保持可能であるということである。

以上、Tanaka 2001 に基づいた本稿での分析に対する問題点とその解決の方向を示したが、VP-ellipsis 分析には日本語における動詞移動が含意され、動詞移動自身が問題となっている現段階では、この代替案も同様の問題を残している。

参考文献

- Abe, Jun. 1999. On directionality of movement: a case of Japanese right dislocation, Ms. Nagoya University.
- Endo, Yoshio. 1996. Right dislocation. *MIT Working Papers in Linguistics* 29:1-20.
- Fujimaki, Kazuma. 2005. On the position of nominative NPs in Japanese: the possibility of nominative NPs in-situ. *Scientific Approaches to Language* 4: 1-32, Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies.
- 原田信一 1977 「日本語の変形は必要だ」『言語』（『シンタクスと意味』福井直樹（編）（2000）大修館書店に再掲）
- Hoji, Hajime. 1998. Null object and sloppy identity in Japanese. *LI* 29:127-151.
- Hoshi, Hiroto. 1991. The generalized projection principle and its implication for passive construction. *Journal of Japanese Linguistics* 13:53-89.
- 井上和子 1978 『日本語の文法規則』大修館書店
- 久野 暉 1978 『談話の文法』大修館書店
- 黒木暁人 2005 「日本語の右方転移構文と左方移動分析」日本言語学会 第131回大会予稿集 314-319.
- 村木新次郎 1985 「慣用句・機能動詞・自由な語結合」『日本語学』1-4: 15-27.
- 宮地裕 1982 『慣用句の意味と用法』明治書院
- Miyagawa, Shigeru. 1997. Against optional scrambling. *LI* 28:1-25.
- Otani, Kazuyo and John Whitman. 1991. V-raising and VP-ellipsis. *LI* 22:345-358.
- Saito, Mamoru. 1985. Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications. Ph.D. dissertation, MIT.
- Tanaka, Hidekazu. 2001. Right-dislocation as scrambling. *Journal of Linguistics* 37:551-579.
- Wasow, Tomas, Ivan A. Sag, and Geoffrey Nunberg. 1984. Idioms: an interim report. In Hattori, S. and K. Inoue (eds.) *Proceedings of the XIIIth international congress of linguistics*, 102-115, Nippon Toshi Center.
- 綿貫啓子 2006 「日本語の後置文：左方移動文との相違」CLS ワークショップ「日本語の主文現象と統語理論」, 2月12日 神田外語大学
- Watanuki, Keiko and Nobuko Hasegawa. 2003. Right dislocation in Japanese:

movement and interpretation. 研究報告書『テキスト理解と学習-テキストの言語の特徴が理解と記憶に与える効果について-』（研究者代表 堀場裕紀江）85-118.神田外語大学 言語科学研究科・言語科学研究センター

261-0014

千葉県美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究センター

350-1197

埼玉県川越市的場北 1-13-1

東京国際大学

言語コミュニケーション学部・国際関係学部

fujimaki@tiu.ac.jp